

浄土

1995・8



武田泰淳と仏教◇長田真紀

念仏と芸能◇榊 泰純

“自分”に気づくこと◇真山 剛

【新連載】外国で生活して①

カリブに生きる——平山 恵

【連載】

楽屋ゆかた——関 容子

念仏信仰の系譜——須藤隆仙

共に生きる——御所野洋幸

誌上特設ざらりい

忘れられた寺院 補遺 残照◆横村克宏



咲いたら、幸せ。

楽しい、嬉しい。

ちょっと切ない、なつかしい。

いろんな話をしたり、聞いたり。

そんな何気ないことが、人と人との

固い絆の第一歩。

それぞれの人の、それぞれのお話に

花を咲かせるお手伝い。

安い市外電話の、0088です。

日本を楽しくする電話

0088

お問い合わせ・お申し込みは、日本テレコムお客様センターまでお気軽に。



0088-82 (無料)

または 0120-0088-82

●受付時間 9:00～23:00 (年中無休)

■ 誌上特設ぎゃらりー ■

残照

忘れられた寺院 補遺

photographer

横村克宏





■誌上特設ぎゃらりー■



今年のはじめ、カンボジアから帰ったばかりの横村克宏に出会い

現地撮りおろしの写真をはじめて見たとき思わず瞋目したことを覚えている。

写真から受けた感動を素直に語るうちに心が通い合い

月刊「浄土」をその最初の発表誌にすることを横村は快く承諾してくれたのだった。

それが

ふとした契機で月刊「浄土」の編集に関わることになった私の

はからずも最初の仕事となった。

編集という仕事をしはじめて25年にもなるが特筆すべき至福の一瞬である。

いわば編集者冥利につきるひとときに私は深く仏縁を感じ

見えないものの加護に感謝していた。

そして四月号から四回にわたる連載が始まった。

私は極力、写真に説明をつけなかった。

横村の写真とは

まさにそのようなものだったからである。

一枚の写真が何を語るのか。

それだけが問題なのだ、と私は頑なに考えた。

アンコールの光と影。

それだけが読者に届けられれば、と念じた。

「忘れられた寺院」は前号で最終回を迎えた。

概ねあたたかい評価を与えて下さった多くの読者に感謝し

ここに補遺として「残照」というコンセプトで最後を締め、お送りする。

合掌

(本誌 佐山哲郎)



■ 誌上特設ぎゃらりい ■



浄土

じょうど

1995/8月号 目次



カラーグラビア残照	写真=横村克宏	3
武田泰淳と仏教	長田真紀	8
念仏と芸能	榊 泰純	16
カリブに生きる	平山 恵	22
コラム		31
楽屋ゆかた中村助五郎	関 容子	32
表紙は語る共に生きる	御所野洋幸	38
念仏信仰の系譜	須藤隆仙	42
コラム		49
〈自分〉に気づくこと	真山 剛	50
コラム		60
Jフォーラム		61
事務局便り		68
編集後記		70

表紙題字=浄土門主 中村康隆猥下

表紙撮影=御所野洋幸

アートディレクション=近藤十四郎

快樂

武田泰淳と仏教

長田真紀

どのように時代が遷り変わっても変わらないものがあるとするれば、それは逆バカドックス説のようだが、無常ということであるだろう。

小林秀雄は、「無常といふ事」(昭和十七年七月号『文学界』)のなかで、しっかりと無常を認識することが常住であるということを書いている。

日本近代文学において、無常ということを書えつづけたのは、浄土宗の僧侶でもあった戦後派作家・武田泰淳(明治四十五年―昭和五十一年)である。

本誌六月号で吉田嘉雄氏も触れておられるが、武田泰淳の文学のなかで、諸行無常はひとつの核となっている。

仏教のどこが好きかと言われますと、諸行無常というのがいちばん好きなんです。つまりすべてのものは変化するという考えです。(中略) ぼくは諸行無常というのは、そうさびしいことじゃないと思うのです。さびしいことじゃなくて、非常にいいことが死ぬのはあんまりいいと思いませんが、しかしともかくすべてのものもがもし変化しなかったならば、なにも存在できなくなるといふふうに考えているんです。

(昭和三十四年三月号『世界』 対談／武田泰淳・鈴木大拙「諸行無常」より)

仏教そのものが、諸行無常を説きながら、変わっていく。これは、恐ろしい勢いで変わって行きます。(中略) 世界の現在の情勢、非常に息苦しい状態も、すべて釈尊がお説きになった、諸行無常の原理の中に含まれていると思います。

(昭和三十四年六月号『浄土』「諸行無常のはなし」より)

武田はしばしば諸行無常について語っているが、武田がこの諸行無常という言葉に行きついたのは、兵隊として戦場に赴いたことや、日本の敗戦によって、滅亡ということを考えざるをえなかったからだという。(昭和三十三年二月号『在家仏教』「人間をささえるもの——文学と仏教——」)

昭和十二年十月から昭和十四年十月まで、武田は輻重兵として日中戦争に出征している。また、昭和十九年六月、上海に渡り中日文化協会に就職するが、そこで敗戦を迎えている。中国文学を学び、中国を愛していると自認していた武田が、皮肉なことにひとりの兵士として大陸に立ち、さらに昭和二十年八月十五日を境に、世界から裁かれる日本人として存在することになったのである。

これらの体験は、はかり知れない罪悪感を生み武田のなかに深い痕跡を残したのである。「こうなっではおしまいだと感ずる瞬間が、われわれにとっては、限界状況に直面したことになるのであって」「そのとき、真の意味において宗教と直面していた、といわれなけ

ればならない」(「人間をささえるもの—文学と宗教—」)と、武田は言う。

武田の父である大島泰信は、大正大学で仏教学を講じていた僧侶であった。母方の伯父には、『大正新脩大藏經』の監修をしたことで著名な浄土宗きつての碩学・渡邊海旭がいた。武田にとって仏教は、求めるものとしてそれを選ぶ前に、身はすでにそのなかにあった。

その武田が真の意味で仏教と邂逅したのが、かの地、中国での体験によるものであったのである。そして仏教のいう諸行無常に、救いの光明をみたのである。

二

宗教というものは、本来は、平等論に立たなければならないものなのです。これはあらゆる進歩主義者・社会主義者・無政府主義者、あるいは唯物論者よりも、すぐれた平等論者にならなければならない。それがキリストの教えであり、釈尊の教えであります。この平等論というのは、ひじょうにやさしいことのように思えますが、じつは、ひじょうにむずかしいものではないか、と私は思う。(中略)人間というものは、かならずどこかで不平等を残しておきたいものなのである、とさえ思うのであります。だからこそ、宗教が平等を求めなければならない、文学が平等を求めなければならない

ないのであります。(中略)

もし宗教者と文学者がむすびつくところがあるとすれば、すべてのものは変化する、すべてのものは変化しながらむすびつく、しかも、ほとんど不可能であるが、平等論に向かつて、すこしずつ動きつつあるということにおいてであります。「人間をささえるもの——文学と宗教——」より

武田は旧制浦和高校三年のころから東京帝国大学入学直後にかけて、左翼運動に足を踏み入れ、そして挫折している。とりわけ、十九歳の昭和六年五月三十日には、東京中央郵便局へゼネストを呼びかけるピラ撒きに仲間の学生二人が行ったところ、うち武田を含む二人が逮捕され、丸ノ内署、本富士署に一カ月間拘留されるという事件——いわゆる中央郵便局事件——も起きている。

一方、僧侶については、昭和二十四年頃、作家生活との両立が難しいという理由で、真因は、後に夫人となる鈴木百合子との生活を始めるためであったが、書類上のこととはいえ住職をしていた深川の西光寺の職をほうり出し、住んでいた中目黒の長泉院から飛び出している。

武田は革命家として、現実社会の平等の実現に挺身することはできなかった。僧侶として、平等への実践活動をすることもできなかった。しかし、武田は文学者になった。

たとえばこの世は諸行無常であっても、見つづける、ということによって成り立つ文

学の世界があるわけです。

（昭和四十七年十月号『波』 身心快樂・如入禪定」より）
「見つづける」こと、そのことこそが、武田の文学行為にほかならなかったのである。

三

武田には未完の小説がきわめて多い。これほど未完の作品を発表した作家もすくないのではないかと思われるが、ここにも武田という作家の特質がよく出ているように思われる。未完であること、いったい人間であることに完成があるであろうか。ありのままの相を見つめていった時、実体があるであろうか。次々と問題をつきつけていったら、完結することがあるであろうか。武田の作品には、諸行無常そのまゝの観がある。

自伝的僧侶ものの代表作に、未完の長編小説『快樂』がある。

これは、現世を改革しようとする社会主義思想とこの世を捨てて来世は極樂に生まれようとする浄土教思想の間で苦悩し、また、愛欲を否定する仏教の、僧侶の子に生まれ、そのことを恥じながら自分の性（生）をもてあました武田の、快樂（かいらく）から快樂（けらく）への彷徨記である。

「もしかしたら、仏教においては」

と、冷たい風から蒼白い顔をそむけながら、秀雄は言った。

「すべてのことは、許されてあるのかも知れないんだ。何をやっても、さしつかえないと、説いているのかも知れないんだ」

「?……」

「すべての快感、すべての覚醒、すべてのイイ気持ちを否定する。これは、これ以上あり得ないほど厳格な規定だ。生きていることの感覚的事実をすっかり否定することだからね。しかし、この厳格きわまる戒律の裏には、星も空気もない虚空のようなものが、ポツカリと大きな穴をあけてはいはしないだろうか。もし『生』によつて、すべての存在、行為、感情が無意味だとすれば、逆に言えば、あらゆる存在、あらゆる行為、あらゆる感情は、それが無意味であるがために、かえって全面的に許されていることになりはしないだろうか」

「わからんよ、ぼくには」

迷惑させられたように、柳は首を振った。

「もしも、快楽が無意味であり、むしろ悪だとすれば、家庭も、民族も、国家も、それから君の愛好している社会主義も、無意味であり、むしろ悪にすぎなくなる。これは、容易に認めにくい真理ではあるが、戒律の第一条、バライを認めるからには、どうしてもそうなるんだ。一たん、この真理（これがホンモノの真理であらうが、

なかろうが、ぼくの知ったこっちゃないが）を認めたとすれば、快樂が無意味であるのと全く同様に、地上の倫理道德、それこそ善いこと、あつばれなこと、けなげな努力、めざましい奮闘のすべてが無意味であると、まあ、考えざるを得なくなってくる。どうせ、万事が無意味であると決まったんなら、何をやろうと、何をしかそうと、同じこと。つまり、すべては許されてあるということに、なるんじゃないか

（傍点原文のまま）

ここでは、仏教では、すべての存在、行為、感情が無意味であるがために、かえってすべてが全面的に許されていることになりはしないか、と問いかけられている。

混沌とした世界をそのまま大きく包み込み、大きな肯定の世界、大調和の世界への到達に向かうように思われる。

刻一刻と遷りゆくこの世のなかで、武田泰淳の提起した問題は、われわれの問題にはかならない。

（おさだまき・上田女子短期大学専任講師）

念仏と芸能



柿
泰
純

特別寄稿

はじめに

念仏と芸能との関係やつながりのあるものとして今回は、主に寺院を中心に行なわれているもので、僧侶が中心となっていたり、檀家の人たちが荷っていたり、地域の人たちによって守られていたりするものの中から、比較的宗教性の多く残っているものを四つほど選んで、概観してみようと思います。

一 百万遍念仏

百万遍念仏には二つの形式があります。一人が七日間（または十日間）に念仏を百万遍唱える方法で、一日には十五万遍（または十万遍）の念仏を唱えることになります。これを「つぶつぶ繰り」と申し、平安時代に行なわれていた念仏です。

もう一つは、十人（またはそれ以上の多人数）が集まって、千八十顆（または数百顆）の大念珠を繰り、参加者の唱える念仏総数が百万遍となるもので、「ざらざら繰り」といいます。この方法の念仏が民間信仰として全国的に行なわれている百万遍念仏です。実際に唱える念仏が十万遍、二十万遍であっても、これを百万遍念仏と申していますし、使用している大念珠を百万遍念珠と申しています。

この念仏は、先亡の追善のため（通夜・年忌・彼岸・盆の時）、先徳の報恩謝徳のため

(法然上人の御忌・善導忌・徳本上人や幡隨意上人などの開山忌など)、虫送り・虫除け・五穀豊穡などの農耕に関するもの、疫病退散・病氣平癒・無病息災などに関するもの、などに行なわれています。

また、この念仏は、村落の各戸から参加するもの、その家の関係者のみのもので、徳本講・幡隨意講など講中の人たちによるもの、御忌や彼岸の時に檀家のみによるものなどの形態をとっています。

この百万遍念仏には各種の信仰要素が混り合っています。天台・真言宗系で行なわれているものには農耕や疫病退散など祈禱的なものが多く、浄土宗系では先亡の追善や先徳の報恩謝徳のものが多くあります。

これに使われる法具は、百万遍念珠のみの場合と、鉦または双盤の加わる場合とがあります。

百万遍念仏は、全国では数百と行なわれているでしょうし、これからも檀家の人たちの

団結を強めるために増加する傾向もあるようです。

二 双盤念仏

双盤念仏というのは、双盤を打ちながら、特別な節をつけて念仏を唱える引声念仏の一つです。

引声念仏は、もともと中国の法照の五会念仏を、天台宗の円仁が日本に伝え、比叡山の常行堂で修したのが始まりといわれています。永享(一四二九―四〇)の頃、京都の真如堂で十日十夜の口称の不断念仏が行なわれ始めて、現在に至っています。明応四年(一四九五)十月に、鎌倉光明寺の観誓上人が堂中で真如堂の大衆と共に引声念仏を行ない、これが鎌倉の光明寺でも行なわれ、今日に伝えられています。この光明寺所伝のものが、関東地方の双盤念仏の源となっています。

北陸地方のは、一遍上人の教化から始まっ

たと伝えられています。

双盤念仏は、十夜法要の時に唱えられるので、十夜念仏ともいわれており、十月、十一月に行なわれています。その他、彼岸・盆・諸法要や葬式・野辺送りに行なったりもしています。

集団で、あるいは数人で、念仏は唱えられ、双盤が用いられますが、光明寺の影響の強い神奈川では雲盤や太鼓が使用されています。

三 踊り念仏

踊り念仏が始められた姿は、一遍智真（一二三九〜八九）の伝記『一遍聖絵』第四に「同国（信州）小田切の里、ある武士の屋形にて、聖おどりはじめ給ひけるに、道俗おほくあつまりて結縁あまねからければ、次第に相續して一期の行儀と成なり」とあって、弘安二年（一二七九）のこととあります。

また一向俊聖（一二三九〜八七）の伝記

『二向上人伝』によれば、建治元年（一二二七五）八月、九州から海路讃岐へ渡ろうとし、海上暴風に遭います。この時、所持の磬を海中に投げ、フナバタをたたいて念仏したといっています。「その後門弟念仏の時毎に彼海中の手を思ひ、その時の志しに打成りて、船中の消息を踊り念仏にして、四反十二段の法式にぞなりける」と書かれています。これについて、大橋俊雄氏は、次のように推定しておられます。

今、山形県天竜の仏向寺を中心に伝承されている踊り念仏の記録によれば（一）舍利念仏、（二）和讃、（三）行道念仏、（四）モ上ゲブユリ（南無の無を上げ、仏の音をユスルこと）、（五）阿ハリブ引き、（六）陀下ゲブ上ゲ、（七）重ネモ引き（南無阿弥陀仏、阿弥陀、無阿弥、ハ）半伏セ念仏（ナンマイダンブツ（三遍）ナモアミ（一遍）、九足踏念仏（ナマイダブツナムアイダナモ）、（十）踊躍念仏（ナンマイダブツ、ナンマイダンブツ 動作が激しくなり須弥壇を

一匝する)、(四)屈伸念仏、(五)結式念仏の順で作法を進め、一段で四遍念仏することを教えている。これが「四反十一段の法式」にあたるのであろうか。(『踊り念仏』一〇七頁)

現在、踊り念仏は、福島県平市の「ジャンガラ念仏」、同県阿沼郡八葉寺の「空也念仏踊り」、岩手県和賀町の「鬼ケンバイ」、長野県佐久市西方寺の「踊り念仏」(二遍上人が始めて行なった地)、京都市の壬生寺の「壬生念仏狂言」、えんま堂の「太念仏狂言」、嵯峨釈迦堂の「念仏狂言」や中国・四国・九州などにも沢山の踊り念仏が伝えられており、民族資料として保存されています。

これに使用される楽器は、太鼓と鉦とを基本とし、それに笛が加わり、地域によっては、瓢・銅鈸子、法螺貝、さらなども加わります。多くはお盆に行なわれ、祖先供養が中心となつてなされていますが、また、追善のため、報恩のため、鎮魂、悪霊鎮送のためなどにも

行なわれています。

念仏が民間に浸透すると、次第に宗教的意味から離れて娯楽化し、念仏踊りとなり、各地で固有の芸能と習合して、郷土芸能となつて伝えられています。例えば、京都地方の六斎念仏、灯籠踊り、関東地方の泡齋念仏、鹿島おどりなどがあります。

四 六斎念仏

六斎とは、上半月の八月・十四日・十五日、下半月の二十三日・二十九日・三十日の六日、謹慎し清浄にしなければならないという、インド固有のものが、仏教と共に伝わったものです。

日本では、鎌倉時代以降、念仏が全国的にひろまり、特に時衆の遊行僧によつて地方伝道がなされると、空也上人に仮託されて、六斎念仏が発生しました。

六斎念仏には重厚な系統として高野山系と

京都系との二つがあります。和歌山県葛城町の天野地区の六斎念仏は、無形文化財に指定されています。奈良県の五条・桜井・奈良市のものも、この系統です。これは、天野の延命寺でお盆の時に行なわれ、その他、二月十五日の涅槃会、春秋彼岸の中日、十夜の時には行なっています。また、念仏講員の葬式にもされます。念仏の節は(1)四遍、(2)おろし(絵下し)、(3)白舞(白昧)、(4)阪東(幡幢)の四曲で、五条には(5)新白米、(6)しんころの二曲も伝えられており、六斎として保存されています。これは、後白阿法皇崩御の後、菩提を弔うために行なわれたのが始め、といわれています。

京都系は、また二系統あり、千葉山光福寺系と空也堂極楽院系との二つです。光福寺系の本山寺である光福寺には現存せず、南区吉祥院天満宮の六斎念仏は、念仏ばかりでなく、石橋・和藤内・道成寺・堀川猿回し・頼光等の芝居がかった芸能が主となっており、獅

子・孕み女・蜘蛛・青物くづし等の曲目があります。右京区桂の六斎念仏は、発願・道行(念仏)・青物くづし・土蜘蛛・三番叟・祇園ばやし・四つ太鼓・かっぱれ、御公卿侍・道成寺・さらし・玉川・八兵衛さらし・石橋・獅子太鼓の順に演じられ、能狂言より取材したものが多くなっています。楽器は、どちらも鼓・太鼓・笛・鉦などを使用しています。

空也堂の系統は、空也堂ではあまり行なわれておらず、右京区西京極の念仏寺に伝わっています。「空也念仏」といっていますが、これは光福寺と対立していましたので、六斎念仏といわなかったようです。(1)太鼓(焼香太鼓)、(2)四へん、(3)板東、(4)白米、(5)シコロの五曲が伝えられています。吉祥院や桂のような芸能はありません。楽器は、釣鉦鉦、太鼓です。

この六斎念仏は、近畿地方に多く伝承されています。

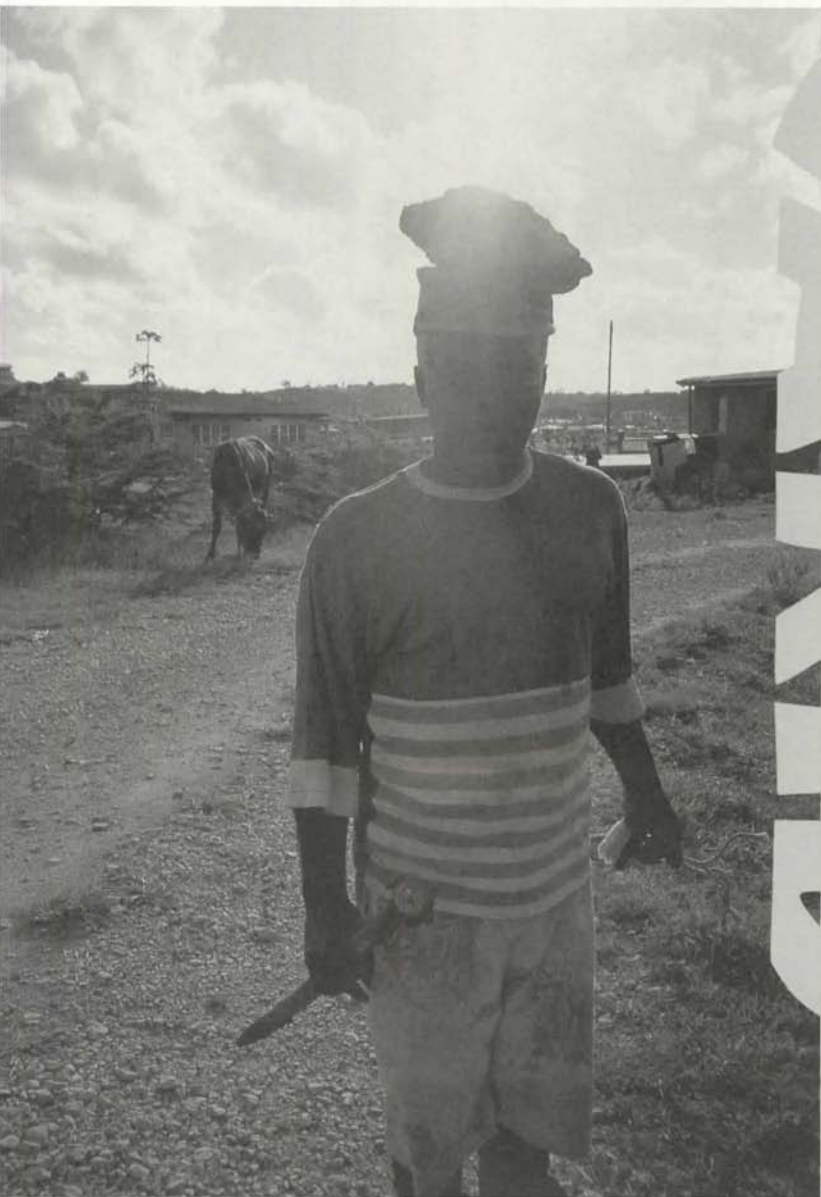
(大正大学教授)

連載

カリブに生きる

平山 恵

外国で
生活して
①



カリブ

◀牛飼いのおじさん
(ANTIGUA)

屋根が飛ぶ。木が倒れる。停電で食糧が腐っていく。1989年、アンチグア・バーブーダ国をハリケーンが襲った。翌月、二年間住んだこの国を私は後にした。

◆いよいよカリブへ

これがエメラルドの海なんだ。——1987年9月11日。ワシントンDCにある世界保健機構のアメリカ事務所で二週間の説明を受けた後、カリブ海上空より蒼い視界に吸い込まれた。1981年に独立したアンチグア・バーブーダについては日本を出るときはたいした情報もなく、私の持っていた古い地図では、国さえ見つからなかった。アンチグアとバーブーダという島と無人島レゲンダとからなる三つ合わせても種子島くらいの国。人口八万。川がない平坦な国。

翌日より国連プロジェクト事務所に出勤。カリブ十二ヶ国を担当する保健教育・情報官として働く。ジュネーブから着任したイラン

人の広報官以外は全てカリブの国籍を持つ黒人が同僚である。アメリカ合衆国留学の際にも黒人の友人がいたが、カリブの人は優雅である。英語もクイーンズ・イングリッシュ。

「ハーイ」などと米国調でいくと軽蔑される。米国では黒人はまだまだ虐げられており、自然に防衛している態度が感じられるが、何といてもカリブでは黒人が多数派。私は唯一の日本人。

米国やスイスに住んだ時も週に一回程度は日本語を使うことがあった。病気になる時やトラブルが生じた時頼りにするのは意志疎通の楽な日本人であった。けれども、もう日本語で思考することがなくなりつつあった。思考回路が違ってくる自分にはつと気づいておもしろく思う。

◆ガイジンの私

黄色人種が珍しい東カリブではミス・チン（中国人）と呼ばれる。ドミニカ（ドミニカ

共和国とは別の国）では街を見てまわろうと出かけて逆に2時間も見せ物になる。歩き始めると前後左右から無数の視線。平気な顔をしているが、緊張している自分を感じる。民家の二階からも中国語を模倣した音で声をかけてくる。子ども達が指さして親や友達に異人の存在を知らせる。日本で「ガイジン」とささやき、英語を話さない白人にも「ハロー」と話しかけると似ている。

着任して10日後に最初の出張。行き先は同じエルバニョーラ島にある二つの国、ドミニカ国とハイチ。この二つの国を上空から見ると国境がハッキリ見える。ハイチ側は木が根こそぎ伐採されているからである。貧しい国ほど環境破壊がすすむ。ハイチでの会合中に魚か水に当たって入院することになった。あまりの腹痛と脱水でなんだか分からないままに汚くて（と記憶している）小さい診療所に連れて行かれてお尻にブスツと注射される。

エイズで有名な国だけに心細かった。しかし、私はこの国で最高の手当を受けていたはずだ。夜中ひとりの看護婦が付き添っていたし、翌日は医者が入れ替わり立ち替わり様子を見に来ていた。退院後すぐに保健大臣やハイチ赤十字社の要人との会合があり、初対面の握手をしようとそこで見た顔が私を見ていた医者陣と重なっていたことが分かった。しかし



ココナツ市場▶
(ANTIGUA)

庶民の貧しさではとてもこんな対応を受けられなかったことは確かである。これから本当に私が掴まなければならない状況の難しさを知ることになる。

貧しいハイチの人々がユートピア・アメリカ合衆国を目指して、食べることも節約して貯めたお金をはたいて船に乗り込む。岸を離れた船、数時間後に別の港に出没。その船に乗客の姿なし。――「船主が乗客を海に投げ込んで金儲け」「ハイチ各地で一日一食が精一杯」続いて「軍部クーデター」。出張から帰ってからラジオのニュースが気に掛かる。

カリブ海の国々の代表が集まって環境の会議をセント・ルシアという国で行った。米国の企業が化学廃液をカリブ海に捨てに来ていた。小さい国は4万人という国もある。先進国の富豪に乗っ取られそうである。我々国連関係者はカリブ当事国の代表者でないということでおブザーバー以上のものにはなれない

し、先に退散しなければならなかった。何とか団結して大国の企業の化学廃棄物投棄を拒否する決議を出して欲しいと思った。しかし2日目を終わっても討論会の域を出ていない。これでは行動はとれない。夜のセツシヨンの後、黒板いっぱいメッセージを残す。「カリブの首脳サミットへ我々の決議をもっていけるかも。：私たちの事務所の資料センターには参考資料も多くあります。皆様のいつそうのチャレンジを期待して：。メグミ」数日後、ワシントンDCにいる会議のコーディネーターより電話が入る。「あのメッセーが利いたな。行動がおきるよノ嬉しかった。」

◆アンチグア・バーブダで暮らす

仕事に追われて運動不足を感じたので、時間の余裕のできた休日は歩くことにした。特に日曜日の朝は信仰心の強い人々の手袋、帽子を含む白一色の正装に映画「風とともに去

りぬ」に出てくる南部の世界に來たのかと錯覚を起こす。時折通り雨に追いかけれ大きな樹下で雨宿りする。歩けば歩くほどアンチグアの燃える花々の輝きに魅せられる。と同時に空き缶の放置も目につく。アンチグアは観光立国である。ところがごみ箱がない。農業が見下される。「重労働である農業に携わりたいアンチグア人などいない。(アンチグアに) 出稼ぎに來たドミニカ人の仕事である。昔のように白人に使われて重労働を強いられるのは真つ平だ。もう土には触れたくないし、自分の子孫にも触れさせたくない。」奴隷制の遺産である。ではアンチグアの人々は働かないのか。彼らは怠け者ではない。

夜レストランに行くときと見覚えのある顔がカウンターの奥で働いている。昼間応対してくれた銀行マンである。アンチグアでは仕事を2つ3つもつ者が多い。農業がすたれ、輸入品に頼っているために物価高である。政府の役人もパン屋兼業。職業を2つ持たない者には車

は売れないというディーラーもいる。車と言えば交通事故に三度もあった。一度目はなんとベッドが降ってきた。向こうから走ってきたトラックに載っていたベッドがしつかりとくくりつけられていなかったのだ。二度目は夜ライトをつけない車と三叉路でぶつかった。三度目はフランス領の島で、後ろを見ないでバックしてきたトラックがバスの停留所へつっこんできてひかれてしまった。

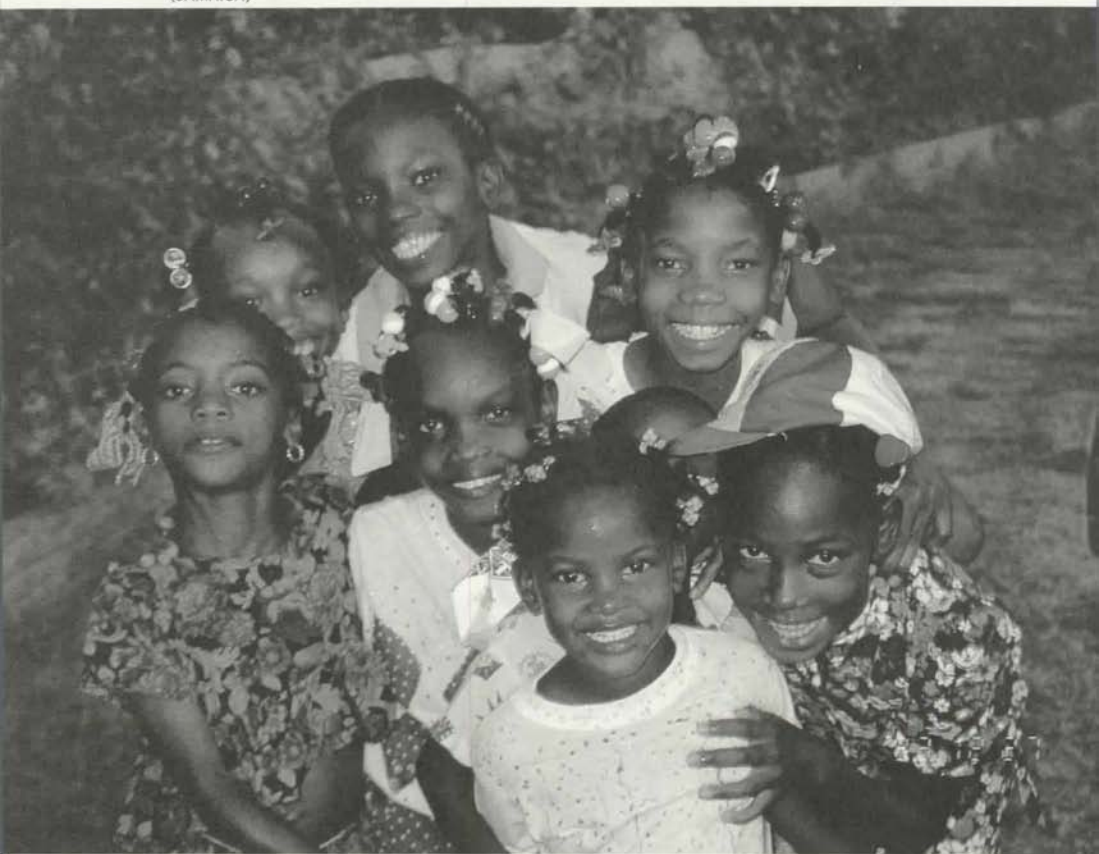
◆松葉杖がない

三度目は良い経験をした(と今だから言える)。まずフランス人の医者が診た。見た所骨も折れてそうにないし「大丈夫だろう」との診断。アンチグアに帰ってあまりの痛さに家の前に住むおじさんに頼んで病院へ連れていってもらう。島にひとりしかない整形外科医があいにく休暇で不在。アンチグア人の外科らしき医者に診てもらおうとフランス人の医者はどう言ったかとの質問。「フランス人の

外国で生活して



▼カリブの子供たち
(JAMAICA)



◆母国に帰れぬ人々

事務所ではもうひとりの非カリブ人であるイラン人シールスと同じ部屋を分かち合っていた。11月のある朝、ベルシャ語で電話に応えているかと思ったら、すすり泣きの声となる。彼の父上が、テヘランにて死去。イラン革命前まで女王の広報官を務めていた彼は、今や（1987年当時）ホメイニ師のイランに戻れば死刑となるやもの身で、過去9年間父親に会えないままで、今年こそは父と会おうとしていた矢先のこと。一日でよいからテヘランに飛んで父を弔いたいとのこと。母国に帰れぬ人々は世界にどのくらいいるのか。毎日隣で働く同僚のなんとも言いがたい悲しみと自分の存在が重なった。カリブという地球の反対側においても希望すれば日本に帰れる自分。いつかはカリブを離れ日本に「戻る」ことを無意識に前提としてカリブにいる自分。

星空を仰ぎ海に浮かぶ。夜泳ぐと仕事の疲れがとれる。元気な太陽の下に光るカリブ海も好きだが、穏やかな月光の海もひとしお。猛烈な勢いで仕事をしていたため、すぐそこにある海と疎遠になっていた。ところが停電が多くなつて仕事を中断することもしばしば。事務所の秘書陣に「メグミ、走らないで。干上がるよ!」どうしても急いでしまふ。怪我をしてから自然に逆らわずに生活をする。日の出とともに活動開始。日の入りは休息の合図。心安らかな生活だ。

◆おばあちゃんを支える「カリブ基金」

アンチグアではいつも地域で子どもを育ててきた。日本も昔はそうだったのだろうか。近所の子どもが悪いことをしたら地域のみんで対策を考える。実子ではなくても適性のある子どもに仕事を継ぐ。海外援助は子どもに光があたりがちである。先進国の有志が第三世界の子どもに出資する里親制は確かに子

いよいよ暑さが厳しくなつて参りました。本格的な夏がやって来たんですね。こうなつてくるとなぜか印象深く感じられるのが、テレビやラジオで盛んに流れているビールのコマーシャルです。何とも言えないほどおいしそうに飲んでいるんですね。ゴクツ。(不謹慎でした)

ところで、よくご存知の通り仏教には仏教徒として守べき戒というものがありますが、仏教の信者となつた者は誰でも従わなければならないのがこの戒です。その中には不飲酒戒ふくしゅくかいというお酒を飲んではいけないという項目があります。むろんそのような規則があるのは、酔っ払つていては修行をする上で大きな妨げになるからです。

若和尚の

五 其 是 不 飲 酒 戒 について

お釈迦様はお酒を飲むことによって様々な悪いことが付きまとうと説かれています。この戒を守り通すというのはいかに難しいものです。頭ではよくわかつてはいるんですけど……。

これについて元祖様は「お酒は飲んでもよいものでしょうか?」という質問にたいして「本当は飲むべきではありませんが、この世の習いなので……」

「百四十五箇条問答」と答えていらつしやいます。お酒を飲めば物事の判断が狂うばかりか他人に迷惑をかけたか、更には自分の体をこわしかねません。言われなくても、本当、よくわかつてはいるつもりなんですけどね、頭では……。しかし、いざそうしようとしてもなかなかでき

ないのが私(たち)の弱いところ。元祖様は、そんな弱い人間には厳しい修行をしたり戒や律を守ったりすることはできないのだから、ただ「どうぞお救い下さい」とお念仏を称え、全てを阿弥陀様にまかせて生活しなさい、と説かれているのです。だからといって、飲食や悪業をすすめているわけでは、もちろんありません。

わが身を振り返れば、どうも元祖様のありがたいお言葉に甘え、安心してしまい、気づかぬうちにどつかとあぐらをかいてしまつていたようです。そのうちに身の破壊を招いてしまうようなことにならないよう、しかと肝に命じたいと思います。

(正)

楽屋ゆかた

その十一

連載

中村助五郎

二

関 容子

助五郎の舞台は生きがいい。『髪結新三』の
 贅売りが揚幕の中から「かゝつおかゝつお」と
 威勢のいい売り声を聞かせておいて、盤台をか
 ついだ助五郎が弾むように花道へ出てくると、
 客席の空気が晴れ晴れする。『暗闇の丑松』の
 風呂番は、これから起こる惨劇とは無関係に、
 鼻唄混りて湯加減を見ていたかと思うと突然寝
 転んで休んだりする。江戸の庶民はほんとにこ
 うだったろうなあ、という気になる。

助五郎は芯から芝居好きの役者なのだ。この
 人の身体に詰まった芝居好きの気持ち自然に
 溢れ出るの、それで生きがいいのだろう。

中村助五郎。屋号は仙石屋。昭和九年鳥取生
 まれ。昭和三十三年中村仲助を名乗り、明治座
 『檻』の酔っぱらい役で初舞台。昭和三十九年
 五代目中村山左衛門を襲名して名題昇進。昭和
 五十一年四代目中村助五郎を襲名する。

助五郎は中村屋の一門なのに屋号が仙石屋と

いうのは、師匠の勘三郎が何か良い名前はない
 かと探していて助五郎の名を見つけ、勘三郎夫
 人が昔の役者の錦絵で『奥州安達原』「一つ
 家」の鬼女をつとめる何代目の助五郎の屋号
 が仙石屋だった、と言ったことによる。名前替
 えをするたびに成長していく弟子を、師匠夫妻
 が手塩にかける様子が知れてほほえましい。

助五郎が勘三郎に弟子入りしたのは十九のと
 きで、その前三年ほどは旅回りの芝居にいた。
 でも芝居好きの芽は、ずっと小さいころに芽生
 えたらしい。

「祖父がたくさん持つてる『演芸画報』が絵本
 がわりでしたから、子供のころに描く絵は丁
 髷の男ばかりでした。そのころ、母の実家倉吉
 のお寺の境内で素人芝居を見て、森の石松が騙
 し討ちに会う間魔堂の場でしたが、世の中にこ
 んな世界があるのか、とひどくショックを受け
 ました。次のショックはあの『勧進帳』の映画
 です。七代目幸四郎の弁慶、十五代目羽左衛門
 の富樫、六代目菊五郎の義経という名優揃いの。

▼名古屋の御園座、
「妹背山御殿」でのトンボ。



▲昭和32年3月 明治座
「本朝廿四考 狐火」の舞台。

小学校四年のとき、汽車で四つ先の町で見ましたが、あまりのすごさに三回続けて見てしまいました。腹が減っても我慢して。おかげで（山伏）問答なんかその日に憶えてしまいました」

今もときどき歌舞伎座で上映されるその名画の強烈な印象が、少年を捉え続けて離さなかった。そして中学二年のときに、助五郎の担任に「女学生みたいな」素敵な先生が赴任してくる。

「その先生と文通ノートのやりとりをしてみたら、役者になりたい、というばくの夢をいろいろに書くんですが、ある晩書きながらそのまんま眠ってしまった、ノートを両親に見られちゃったけど、叱られはしませんでした。

親父は鳥取の梨づくり農家ですけど、やはり芸能が好きでしたから。で、中学を卒業して、旅回りの一座に入りたいと言いつつと反対もされずに、洗濯のし方とか銭湯の入り方とか、親父が井戸端に出て教えてくれたんです」

その一座は助五郎が中学二年のときに鳥取に来た。終演後に座長を訪ねて弟子入りを志願し、

巡業のコース表をもらったので卒業と同時に山口県の下松^{くみまつ}に追いついて一座に加わった。

「旅回りをしながら、あの『勸進帳』の世界とはずいぶん違うなア、と思つてました。そうしたら京都の南座で初代吉右衛門一座の芝居に出会つたんです。三代目時蔵、歌右衛門、先代幸四郎、それに勘三郎。夢中で見て、ほくの探していたのはこういう芝居だつた、と思ひました」

助五郎は思ひのたけを勘三郎に宛て手紙に書いた。中学の先生と文通していたほどだから、筆まめなのだ。じきに承諾の返事がくる。あとで聞くと、その手紙がなかなかの名文で、師匠夫妻は勝手に二枚目の文学青年のイメージをふくらませてしまつたらしい。

「旅の一座から夜逃げ同様に逃げ出して、東京に着いたのが十二月二十四日の早朝でした。シングルベルの曲がどっから流れてましたね。交番で手紙の住所を見せて道を訊いて、都電を乗り換えながら半蔵門のお宅へたどりつくと、

久枝奥様が出ていらつしやつた。奥様はおなかが大きくて……それが若旦那（勘九郎）との初対面です（笑）」

すると久里子さん千代枝さんの姉妹はそのころ九つと七つくらいだつたらう。

「あの朝助五郎さんたらね、ママが朝御飯をいくらすすめても食べないで、部屋隅の隅に正座して駅弁の残りを食べてたの（笑）。妹と二人で笑つて笑つて」

と久里子さんから聞いたことがあつた。

「夜、師匠がお帰りになるなり『顔が悪いよう』（笑）。でもいい人そうだから置きましょうよ、つて奥様が。あくる日芝居へお供したら、師匠に作者部屋の小田島さんて人が言つてました。『いい男ばかりじゃ芝居ができません』。やっぱり顔の話なんです（笑）」

近ごろ助五郎は、勘九郎が『夏祭』のときは勇義平次^{ゆうぎへいじ}、『封印切』では八右衛門と、重い役をよく振られる。やはりその個性的な風貌で得をしているし、何より存在感があるのがいい。

「久里子さんもその『個性的』、千代枝さんも『存在感』っていうので慰めてくださいますけどねえ（笑）」

と助五郎は嘆くが、でも勘三郎もすぐに入門したてのこの内弟子を気に入って、仲助という名前と一緒に、でこ助という仇名をつけた。機嫌がいいと「でこちゃん」と呼ぶ。助五郎はおでこなのだ。

しかし当時の内弟子の生活というのは、想像以上に大変なものだった。

「夜、食事のあとにブリッジとか麻雀をなさいますでしょ。それからお酒を飲み始めて、たまにハイボールを作って『お飲み』ってくださいました。それから『寝るよ』というのが二時三時。するとほとくの出番で、足揉みです。足の親指と人指指の間をキュッキュッと押ししたり、親指の脇にコリコリするところがあって、そこを揉みほぐしたりすると寝息が聞えるから、そおーっと力を弱めると足をバタバタとさせる。催促です。もつと揉めという。短かくて三十分、

長いと一時間半。『ありがとよ』と言われるのが明け近かったりしました。ですからあのころはうまく寝て四時間でしたね。朝になると応接間の掃除がほとくの役です。石畳の床なんてモップで掃除するんですが、師匠が芝居に出かける前に踊りの稽古から帰ってきてないといけない。それでたまに水をまいて濡らしただけでごまかすと、奥様にちゃんと呼ばれて、言われるんです（笑）」

仲助の助五郎は、三階大部屋（楽屋）の仲間入りをさせてもらうのに、勘三郎夫人に連れられて行つた。石鹼三個入りの箱をみんなに配つて、入口のすぐそばに居場所が決まる。

「師匠が『まず幹部に認められるにはトンボだよ』とおっしゃって、久枝奥様がおせんべの大きな缶を持って、八重之助さんに教えてやってくれるようにと頼んでくださいました。尊敬する六代目（菊五郎）のお嬢さん（久枝さんのこと）に頼まれたんで、八重之助さんが本当に熱心に教えてくれて……。ほとくの両脇に二人立って、

▼昭和36年11月、
明治座の楽屋で勘九郎と。



▼「裏庭でトンボのけいこにはげむ
中村仲助と勘三郎（右）」
昭和35年4月の新聞記事。



手拭いを縄跳びみたいにかけて、それで返る練習をするんですが、あんまり稽古しすぎて内股が肉離れして赤紫色に膨れ上がりました。それでも稽古は休みませんでしたね。おかげでじきに返れるようになって、成駒屋（歌右衛門）の旦那から『奥庭』の八重垣姫にかかる二人のうちの一人に指名していただいたときは嬉しかったです」

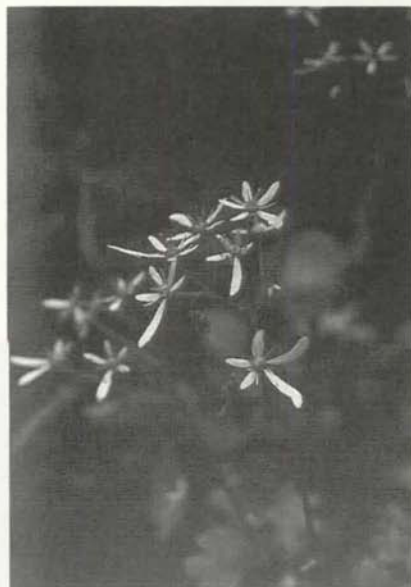
そんなに頑張つてよく身体がもったものだ。それに睡眠時間は足りたのだろうか。

「楽屋で寝そべったりしたら、それこそ大目玉ですが、もうたまらなく眠くてクラクラするときは坐ったまんま化粧台の下に頭突っこんでちよつと寝ることもありました。あのころの三階には秀十郎^{ひでじゅうろう}さんを初め、怖い人がたくさんいましたけど、ああ、中村屋の内弟子でさぞ寝が足りないんだろう、って、古い人も見て見ぬふりをしてくださったんだと思います。有難いことでした」

（エッセイスト）

表紙は語る
共に生きる
ブナ原生林から

●
本誌表紙写真／文
御所野洋幸



森は水を貯え、土壌を作る。

地球の温暖化の原因になっている二酸化炭素を吸収し、鳥獣を育て、プランクトンや虫の育成まで行ない、結果的には魚類も保護している。

その森の働きの要、それがブナの原生林なのだ。

樹齢150年のブナ1本で、約8トンの水を貯え、ヘクタールあたり年間10トン近い葉を落とすという。

雨が地表を走ることを抑えて洪水を防ぐブナ。

果実は鳥獣を養い、落葉は土を肥やし、山菜や他の野草を育てるブナ。

森の母、森の医者と呼ばれるブナ。

そのブナと共に生き、写真を撮り続けるひとりの写真家がいる。

満天の星空の下で

八月十日、水辺や日陰のブナの葉は厚く深い緑で美しいが真夏の強い日を浴びている葉は表面が白っぽくなり、カーリングしている。そのため林の中は光のあたる部分が少し多くなる。真夏の太陽光線の感度のせいもあるが、林の中はコントラストが強過ぎ普通の写真撮影の条件としては良くない状態となる。それで真夏のブナ林の撮影は早朝と夕方、日中は日陰、又は清流の周辺となる。

林の中は小鳥の声も、清流の音も蟬の大合唱で押し潰される。こんなに続けて啼いて蟬は疲れないものだろうかと思うほどである。それにしても今年は蟬が多い、身体の回りに常にやぶ蚊がいる。シャッターを切るため十秒程指を止めると一、二ヶ所はやぶ蚊にやられる。蚊よけの網をかぶり、長袖にゴム長

靴、カメラ、三脚、涼しい林の中でも暑い、涼を求め、やぶ蚊と蟬の合唱から逃れて沢の中を歩きながらの撮影にした。水辺のブナは沢風でゆれながら涼しげだ。時々足下から岩魚が踊り出る。

岩場の苔に白く小さい花が咲いている。十〜十五センチ程の茎に一センチ程の小さい花だ。こんなに小さい花なのに花びらはしっかりと大という文字に見える。楽しくなる。ミヤマダイモンジソウだ。上の方ではキツリフネがゆれている。カメラにマイクレンズを取り付けた。花は沢風でいつまでもゆれている。

草花に夢中になっているとやぶ蚊の大群におそわれた。また沢に戻り蟬時雨と清流の音の世界を撮影しながら桃洞の滝に向う。遊歩道を通ると四十分の距離だが三時間で桃洞の滝に着く。説明のいらない滝である。女陰に似ているのである。しかし嫌らしさはなくむしろ気品さえ感じられ堂々としている。一枚岩が長い年月をかけ水の流れて形作られたも

のであるがどうしてこういう形になったものか不思議である。この滝を見て人間共がどんな反応を示すか山の神様が試している。私にはそう思えてならない。私はこの滝を「安産の滝」と呼び手を合せ頭を下げる。この滝に何人案内したことだろう。男性も女性も、誰もが感嘆の声をあげる。すごいなあーと見惚れそしてにこにこ笑顔になり優しくなる。私はここのブナ林に遊びに来た人達に必ずこの滝を見て帰るようにと勧めている。

道端の水芭蕉の葉の下やフキの葉の下回到実生からのブナの芽が出ているのに気がついた。この時季水芭蕉の葉は不気味なほど大きく一メートル近くにもなっている。その下に細い茎で五センチ程のび三センチぐらいの柔らかい同じ大きさの葉を二枚同じ角度で広げている。まるで子供が両手を広げて上を見ている様と同じだ。それを水芭蕉の葉とフキの葉がしかもまもっているように見える。

この小さなブナが百年二百年無事育つため





にも、異常気象や酸性雨など地球上に異変が起らないことを祈らずにはいられない。

キャンプ場の近くでキノコ狩をしている家族連れに合った。栃木の人でチチダケを取っている。栃木県ではチチダケと呼び大変な人気を集めているという。

夏休み中は家族連れのキャンパーが多く赤や黄色のテントでキャンプ場は賑わいをみせていた。夕食は栃木のチダケとナスの油味噌炒めと、私の馬肉とヒラタケの煮物と交換し合い、木の話、森の生活の話、山菜の話、など山の話題だけで一緒に酒を酌み合った。満天の星空の下で焚火はトロトロ燃え心楽しい一夜であった。

森は緑一色である。大量の緑その濃淡のさまざまな緑を、萬緑という季語を始めて俳句に使った中村草田男氏の句、『萬緑の中や吾子の菌生えそむる』

私に里心が出て来た。

念仏信仰の系譜

須藤隆仙

日本編

五

● 選択ということ

前述したように、善導大師は阿弥陀如来様の悲願に留意すべきであることを教えられ、法然上人はそれを受けて、称名念仏こそ阿弥陀如来様が私たち凡夫のために選択して下賜してくだされた行である、と道理立ててくれたのでありました（選択は浄土宗義上ではセンチャクと読む）。ために法然上人は「偏ひとえに善導一師に依る」と仰せられたのであ

りますが、法然上人の弟子親鸞聖人はこのことに感激して、「善導ひと独り仏の正意しょういを明らかにせり」と言い放たれたのでした（『正信偈』）。

法然上人はまた『選択集せんたくしゅう』の中で、単に仏といっても、それは弥陀の選択、釈尊の選択、諸仏の選択と、三仏の選択が重なっているのだと教えられたのでありました。ここにまた、念仏というものは、単に阿弥陀様の御意だけによるものではない。仏教の教主釈尊の御意でもあり、また一切諸仏の御意でもあるのだ。ということが明らかにされたわけではあります。つまりお念仏というものは、全仏教のものであるということが明瞭になった

わけです。

『選択集』は詳しくは『選択本願念仏集』で、建久九年（一一九八）法然上人六十六歳のとき、前関白九条兼実の懇請によって著された書です。兼実公は大変な上人の帰依者であられました。上人が「われ浄土宗を立つる」と仰せられたその浄土宗の教義が、理路整然と並べられており、浄土宗の根本宗典とされているのであります。それが単に今日いうところの浄土宗というわく内だけにとどまらず、広く弥陀浄土教全般の奥義書であることは、親鸞聖人が『教行信証・後序』に、「真宗の簡要、念仏の奥義、これに摂在せり。見るもの論り易し。まことにこれ希有最勝の華文無上甚深の宝典なり」と感泣記述していることによっても、知られるものであります。

このことが分かりますと、法然上人というお方は、私たち凡夫の世界に、仏様の世界というものを開き展げて下された。そういうお方であられたということが、さらに分かれ



て頂けるのでありまして、この上なく有難いことなのであります。

勿論、「偏に善導一師に依る」といっても、他の祖師をないがしろにするという意味ではありません。だいたいがして善導大師は道綽禪師の信仰を継いでおられる。その道綽禪師は曇鸞大師から受け継いでおられる。曇鸞大師は、さらにインドの世親菩薩・龍樹菩薩から信仰を頂いてきている、といった具合なのです。ですから、善導大師の教えといっても、それは遠く以前の祖師の教えをすべて包含しているものであります。ですから善導大師をさかのばれば曇鸞大師まで行ってしまう。さらにはお釈迦様、阿彌陀如来様と、信仰の大河は源流へとつながるのであります。ために浄土宗二祖聖光上人（法然上人の弟子）は、その著『徹選択本願念仏集・上』に次のように述べておられます。

「選択本願念仏の義は、更にもって法然上人の義にあらず。即ち是れ龍樹菩薩の義な

り。また龍樹菩薩の義なり。また復た法蔵菩薩の義にあらず。即ち是れ先仏の義なり。先仏の義なるがゆえに、即ち是れ法蔵菩薩の義なり。法蔵菩薩の義なるがゆえに、即ち是れ龍樹菩薩の義なり。龍義菩薩の義なるがゆえに、即ち是れ法然上人義なり」(法蔵菩薩とは阿弥陀仏がまだ修行中だったときの名であって、その先にもたくさん

の仏がいたとされる)

ですから善導大師の教えというのは、先仏から法蔵菩薩、釈尊・龍樹・世親・曇鸞・道綽といったお方々の教えがすべて含まれた丸薬なのであります。大師はそういった丸薬を作られた。法然上人はその丸薬を仕入れて「浄土宗」という店開きをした、と、こういうことになるのであります。

法然上人は、前述のように恵心僧都からも大きな影響を受けたのでありますが、その恵心僧都の『往生要集』は、「もはら善導和尚の釈義をもて指南とせり」(勅修御・



六。指南は教導の意」というのですから、善導大師を主とされ、恵心僧都を副とされたのでした。

●念仏の元祖

法然上人は安心(信仰)とか起行(実践行)とかいうものの図式を、善導大師からそのまま頂いてきて、「浄土宗」という店開きをされました。ただ上人独自に加えられたものの、つまりオリジナルといえば、右に述べてきた「選択」ということなのであります。仏教には聖道門(聖者の行法)と浄土門(凡夫の行法)とがあるが、浄土門のほうを選べ。浄土門の中に雑行(雑多の行)と正行(念仏や三部経読誦、弥陀への礼拝供養行など)とがあるが、正行のほうを選ぶ。正行の中に正定業(念仏一行)と助業(読誦・觀察・礼拝・讃嘆供養)とがあるが、正定業のほうを選ぶ、と、こういうのであります。そしてこれは、阿弥陀仏の御意によってそうす

べきものなのだ、というのが、上人の主張なのでありました。

しかし、仏の慈悲は平等でありますから、選ばれなかった（捨てた）行法でもすべてが念仏生活を助けるものでこそあるのだ（広い意味での助業）というのが、上人の教えの全容なのでもありました。次のお言葉こそ、上人の念仏信仰の広大深遠さをよく示したものでいえましよう。

「衣食住の三は、念仏の助業なり。これ即ち自身安穩あんゑんにして念仏往生をとげんがためには、何事もみな念仏の助業なり」

「現世を過ぐべきようは、念仏の申されんように過ぐべし。念仏の妨げになりぬべくば、何なりともよろずを厭いとい捨てて、これを止むべし。曰く。聖ひじりて申されずは妻めをもうけて申すべし。妻をもうけて申されずば聖みことにて申すべし。住所にて申されずば流行ぎやうして申すべし。流行して申されずば家にいて申すべし。自力の衣食にて申されずば



他人に助けられて申すべし。他人に助けられて申されずば自力の衣食にて申すべし。

一人して申されずば同朋どうぽうと申すべし。共とも行ぎやうして申されずば一人籠かごりいて申すべし」

（共に『和語灯録・五』）

念仏の教えは、ここ法然上人に至って、ここごく完全無欠化されたといひ得るものがあります。善導大師においても完全化はされておりましたが、しかし出店してこれを大々的に売り出されたのは法然上人なのであります。

法然上人によつて完全無欠化された念仏信仰は、やがてそれ以後、上人の弟子たちによつて、支流・分流の勢いとなつて大きく育つていくのであります。つまり、法然上人は念仏信仰を総結された、その次に弟子たちがそれぞれの部分を頂いてきて塊かたまりをふくらませていった、そういうことになるのであります。そういう意味では、法然上人の念仏信仰というものは、これまでを帰納されたものとい

い得るのであり、上人以後のそれは、演繹的な展開といってよいでありましょう。

●法然上人の弟子たち

法然上人のご業績の大きなものの一つに、浄土三部経の制定ということがあります。多くの經典の中から『仏説無量寿経』『仏説観無量寿経』『仏説阿彌陀経』の三経を選ばれて、これを浄土の三部経と指定されたのであります。上人以前の祖師の中にもこの三経に着目していたお方はおられますが、はっきりとこれを制定なされたのは法然上人でありました。これは日本仏教史上、また世界浄土教史上、特質すべき大業績なのであります。

さてその浄土三部経ではありますが、お念仏を標榜する各宗派において、この三部経に対する信仰態度が少しずつ異なるのであります。例えば、坪井俊映先生著『浄土三部経概説』にも、浄土宗・真宗・浄土宗西山派・時宗などの三部経観が記述されております。



どうしてそうなっているかと申しますと、前述したように、完成された法然上人の浄土宗から、弟子たちが部分を頂いてきて一派を成していったからであります。浄土宗の二祖聖光上人は、師法然上人亡き後の状態を、「上人往生の後は、その義を水火に諍そい、その論を蘭菊に致して、かえって念仏の業を失い、空しく浄土の業を廃す。悲しき哉、悲しき哉、何がせん、何がせん」（『末代念仏授手印』）といっておられます。いかにさまざまの流派が出現したかがわかるのであります。当時の法然上人の帰依者はたいへんな数にのぼったようであります。日蓮聖人は「一天四海一人もなく法然が弟子となる」（『撰時鈔』）といっておりますが、これは誇張であるにしても、近年発見された源智上人（法然上人の弟子）の念仏信者名帳（『結縁交名』）には、約五万人もの信者名が記されているのです。当時の日本の情勢のなかで、これだけの信者が記録されているというのは大

変なことて、法然上人を慕う人たちがいかに多かつたかが分かるのであります。「私聚百因縁集」という鎌倉中期の本には、法然上人の門徒を「数千万」と記し、上足五人としております。上足とは高弟のことて、その五人は、幸西・聖光・隆寛・証空・長西といった人たちだとしております。上足については他書にも諸説があつて、六人・七人・九人・十五人・二十四人などを挙げる書もありますが、今日では右の五人説に親鸞を加えたものが一般に知られていますので、それら六人について述べてみましょう。

●六人の高弟たち

聖光上人（一二六二—一二三八）は浄土宗の第二祖を継がれた方です。法然上人の跡を誰が継ぐかということについては、それぞれが自分こそ思っていたようでありまゝです。それは我利の山師根性からではありません。強い念仏信仰の純情からくるものであ

りまして、信仰に対する揺ぎなき自負心からでありました。

聖光上人も前記のように法然上人の教えが種々に解釈されているのを嘆かれ、四十八日の別時念仏を修され、「然師報恩のため、念仏興隆のため」に、『末代念仏授手印』を著されたのでした。そしてそこに記した念仏教義こそ法然上人正伝のものであるとして、証明に自らの手印を押したのであります。ために授手印というわけてあります。

聖光は字であり、僧名は弁長といい、他に弁阿・鎮西上人・筑紫上人・善導寺上人などの称があります。この称でお分かりのとおり、上人は筑紫（福岡県）の生まれでありまして、父は香月城主の弟香月則茂でしたが、上人は九歳で出家したというのです。何で出家したかといいますと、とても聡明だったので勉強させて偉い坊さんにしようという両親が考えたかららしいのです。やがて筑紫の観世音寺で受戒した上人は、あちこちの寺で天台の



教えを学び、二十二歳のとき比叡山へ登って
勉学修行し、二十九歳再び郷里香月に帰って
翌年^{あふらやま}油山という仏教聖地の学頭に推されま
した。ここには数百の増坊があつたそうです。
三十六歳のとき、仏像を求めに京都へ行った
のですが、そのとき法然上人が京都^{ひがしやまし}東山吉
水^{みづ}（今の知恩院付近）にいて、すばらしい教
えを説いていると聞き、法然上人の力量を試
すつもりで訪ねたらしいのですが、その教え
の深遠さに驚いてしまい、自らの不明を恥じ
て弟子になるのであります。三カ月はどて筑
紫へ帰りますが、三十八歳でまた上落して法
然上人の仕え、四十三歳で帰郷するまで、み
つちり教えを受けたのであります。両上人
は歳の差二十九であります。

帰郷後は善導寺その他を建てましたが、建
暦二年（一二二二）法然上人没後は念仏布教
のかたわら多くの著書を書かれ伝道に励まれ
ました。暦仁元年（一二三八）七十七歳で入
寂^{いひ}されますが、その二年前に石見^{いひ}（島根県）



の僧良忠^{りょうちゅう}が入門しており、この方が浄土宗
三祖であります。

聖光上人は、もっぱら法然上人の教えの祖
述と顕彰に努力されたのであります。その帰
するところは、「一字をも知らざるの身とな
り、黒白^{くろびやく}をも弁えざるの身となり、称名ば
かりを以て朝夕にこれを歌うべし」（『授手
印』）とあつて、法然上人が教えられた愚鈍
念仏をそのまま順調されたのであります。ま
た「源空が目には、三心も五念も四修もみな
俱に、南無阿弥陀仏と見ゆる也」の語を伝え
て（前同書）、すべてが念仏の一行三昧に帰
結することこそ法然上人の教えの真髓である
と結ばれたのであります。（つづく）

（函館・称名寺住職）

倉敷市の民芸館の館長を勤め

られた外村吉之介さんの講演の中に次のような話がありました。

「人間長生きの秘訣は『頭寒、足熱、腹八分』と言われていますが、その意味お解かりですか。頭寒と言ったって、冬でも氷枕をしろというのではありませんよ、足熱と言ったって、夏でもこたつに入れというのではないのです。『頭寒』とは、ノボセアガルナということです。そして『足熱』は、地にしっかり足をつけてものごとを見ろということ。また『腹八分』も、そのとおり腹一杯食うんですが、これは食欲にも、金欲にも、名譽欲にも言えることなのです。こうしたことを、常に頭に入れて、生きてゆくことを私はこ

ろがけてきました。」

米寿のお祝い会でのお話で、

講題は「木綿往生」でした。先生は、姿かたちを変え、さまざま用途で人々のお役に立ち、

そしてボロボロになってからも、雑巾としてその生涯を全うする木綿の一生こそ、我が理想の一生とお話になられたのでした。

「困った時に思い出され、

用が済めば忘れられる

ぞうきんになりたい」

という詩もご紹介になられ、また道元禪師が、雑巾を浄巾と言いついて変えている話などもされました。

我々若い者には深く考えさせられるお話でした。

またノボセアガルナで思い出したのですが、先日東海大学の

◆◆◆ 頭寒、足熱、腹八分 ◆◆◆

首藤先生がこんなお話をなさいました。

「福沢諭吉先生の有名な言葉、

『天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず』のあの意味ね、最近ようやく解かったのですよ。普通はこれ四姓平等の言葉と単純に受け止めている人が多いんだけど、あの福沢先生、そんな理想論を言ったんじゃないね。人は時として人の上に立つ時があつても、ノボセアガツチャいけないよ、人に仕える時があつても、卑屈になつてイジケチャいけないよ。という処世訓として言ったんだね。私も五十を過ぎて漸く解りました」

まだ五十に手の届かない私には、実に考えさせられるお話でした。

(潤)

“自分”に 気づくこと



ティック・ナット・ハン師の
リトリートに参加して 真山 剛

三泊四日のセミナーに参加することにした。

知り合いのお坊さんが勧めてくれたセミナーで、しばし喧噪を離れ清里のキャンプ場で過ごす。セミナーといっても会社の研修会ではないし、普段は東京のビルの谷間を息せき切って走っているのに、四日間ゆっくり休める、という気持ちで参加を決めた時の本音だった。

そんな気持ちを見透かすかのように、そのお坊さんはこう言った。

「とにかく参加してみなさい。きつとゆっくりできますから」

会社からは4日間の年休をもらい、ちよつとした小旅行、そんな気分て電車に乗りこんだ。予定通り昼前に着き、清里の駅周辺をぐるり一回り。お昼を食べた。これでは本当に観光旅行だ。

時間に余裕もあるし、腹ごなしも兼ねて目的地まで歩くことにした。青空の下、なだらかな坂道をゆっくり歩いていると、一台の車が止まり運転している男性が声をかけてきた。

「ティック・ナット・ハン師のリトリートに参加の方ですか？」

「ティック・ナット・ハン。1926年、ヴェトナム生まれの禅僧。ヴェトナム戦争に対し、お寺の中で修行をしながら、戦争の被害に合っている人々を救うことを実践し『行動する仏教』のリーダーとなる。戦争中に渡米し、平和提案を行いヴェトナムから帰国を拒否され、現在はパリに亡命中。南フランスに仏教者の共同体『ブライムビレッジ』をつくり、生活と一体となった瞑想をしながら農園を営む。そして多くの難民の救援活動を行っている」

これがティック・ナット・ハン、ハン師のプロフィールだ。今回の来日は講演や瞑想の指導をするためで、この清里の前にすでに「泊まりがけの瞑想体験（リトリート）」や「講演（ダルマトークⅡ法話）」を行い、どの会場も定員枠いっぱいの人が集まったという。

受付の時間が近づくと続々と参加者が集まっ

てくる。係りの人に参加者名簿を見せてもらう。全国から集まって来ている。外人もかなりたくさんいる。「ハン師は日本ではあまり知られていないが、ダライ・ラマと同じぐらい世界では有名な僧侶です」というお坊さんの言葉を思い出した。

会場まで車に乗せてくれた人は、栃木から来たサラリーマンだったが、参加の意気込みはわずかな会話で十分わかったし、全国から駆けつける参加者のこのリトリートに寄せる期待は並々ならぬものようだ。

旅行気分の自分がちよつと不安になった。

自分の呼吸を知る

台風のように／激動の中にあつてこそ静かに平和をみつめる目を持ちたい

その大きなヒントが／ここにある
そんなリトリートになりますように

それは／与えられるものではなく
わたしたち一人ひとりの
主体的な参加の中から
生まれるのではないでしょう

オリエンテーションで配られたスケジュールのパンフレットはこうしたメッセージで始まっていた。

四日間の日程に目を通す。

トータルリラクゼーション、法話（タルマトーク）、座る瞑想、歩く瞑想、お茶の瞑想が並ぶプログラムの欄外の二つの言葉に特に興味をそそられた。それは

・食事の最初の20分間は沈黙で、食べることに集中します。

・就寝から朝のプログラムまでは、聖なる沈黙を守ってください。

というたし書きだ。

「沈黙」。随分昔、学生の頃にこれと同じ題名

の本を読んだことを思い出したが、社会に出てからはこの言葉とは無縁だった。

物を売る仕事に就いてからは「沈黙」という言葉は金どころか、むしろ錆び付いたクズ鉄同然だ。しゃべらなければ頭が悪い、損だというような国柄ではないが、セールストークはしゃべることだし、仮に沈黙しても、それは沈黙のための沈黙ではなく、次に切り出す言葉のための演出だ。しゃべることが金であり、言葉こそ最大の武器だった。アメリカでもビジネスランチといって商談と食事を兼ねていると聞く。

いったいどんな食事なのだろう。

オリエンテーションが始まった。スケジュールの説明や施設の利用の注意のあとに、内容の簡単なガイダンスがあった。

ポイントは、一日を通して瞑想してマインドフルになりましょう、ということだ。

マインドフルとは、やすらぎと気づきで、どういふことかは実践の中でわかってきます、ということだった。その実践とは瞑想で、どの

瞑想にも呼吸法が大切で、自分の呼吸を意識することが気づきの第一歩となる。

みんなて呼吸法の練習をする。ベルとよばれる鐘。その鐘は仏壇にあるような手の平に乗る小さなものと、お寺にあるような洗面器を大きくしたような鐘だが、この鐘が鳴ると何をしていてもそれを止め、自分の呼吸を意識して三回数えるのだ。これは最後の夜の質疑応答でわかったのだが、通常の呼吸を意識して数えるのであって、意識してする呼吸を数えるのではない。自然のままの自分に気づくということなのだ。

こうして瞑想の方法のあらましが説明され、オリエンテーションが終わった。

続けて、疲れをとるため、また緊張をほぐすためにトータルリラクゼーションをすることになった。畳を敷き詰めたホールに全員が横になる。ハン師の一番弟子であるシスター・チャン・コンさんの指導のもと、最初のプログラムが始まった。眠ってしまったても構わないとの前置きのあと、体の一部に力を入れ、そして力を

フランスのプライムビレッジでの歩く瞑想。



抜く、それを何回か繰り返す。しばらくすると、いびきがどこから聞こえてきた。そのうち、そのいびきを子守歌がわりに自分も寝てしまった。

自分自身で確かめる

リラックスしたあとは少人数のミーティングだ。東京からの参加者は地域によっていくつかのグループに分けられた。ハン師とともにプライムビレッジで生活をとるお弟子さんが各グループに入るため、グループに一人、英語の通訳が必要という。西東京は4人いた外人は日本語が、6人の日本人も2人が英語が話せるという国際色豊かなグループで通訳には事欠かなかった。

グループ分けが落ち着くと、それぞれがこのリトリートに参加した理由を述べる。

ハン師の著書を読みその考えに共鳴したので……、以前から瞑想をやっていた……、と参加

ハン師のダルマトーク。子供の参加も構わない。



の動機を順番に説明する。みんなはつきりした目的をもっているのがよくわかる。順番が回ってきた。「知人に勧められて」とだけ言って、気楽な気分できたことは棚に上げておいた。だが実際、その時はもう気楽な気持ちはどこかに行っていた。

ミーティングが終わると、食事の時間だ。

そう、沈黙の食事だ。

だが、食堂に行く前に、さっそく習った呼吸法をしなからの歩く瞑想となる。ホールから食堂までの300メートルをゆつくり歩く。普段は駆けるように歩いているが、呼吸を意識して歩くとすごく遅い。まるで牛のようだ。回りを見ると、みんな初めての歩く瞑想だけに、これでもいいのか不安そうなのがわかる。とにかく教えられたことを確認しながら歩いて行った。

七分ごはんのみをおでんが最初のメニューだ。食事の前にベルが鳴る。自分の呼吸に意識を集中する。静かに食事が始まる。80人以上の参加者に、スタッフを加えれば100人を越すが、

余計な物音も声もしない。

まずごはんを食べる。口の中に神経を集中し、ゆっくりと噛む。ごはんの味がすこしづつ口にひろがってくる。おいしい。こんな味だったんだ、ごはんは、と驚く。一箸ごとに箸を置き、ゆっくり食べる。次はみそおでんだ。みその味がした。大根の味もした。そしてコンニャクも味わった。食べ方でこんなに味が違うものなのだ。20分過ぎても音はない。東京にいる時なら20分あれば、昼ごはんを4回ぐらい食べているだろう。だが、こうした沈黙の中のゆっくりした食事で得られたものは、東京では味わったことがない。

怒りも友にする

食堂からホールに戻る。帰りも自分の呼吸を確かめながら、一歩、一歩、ゆっくり歩く。

いよいよハン師、ティック・ナット・ハンの登場だ。

第一回目の法話、ダルマトークが始まる。

全国から集まって来た80数名の視線が、ゆっくりと壇上にあがるハン師に釘付けとなる。通訳をする日本人のお坊さん、そしてハン師の弟子も席に着く。

大きなベルが鳴る。

固唾を飲む中、優しい静かな声で法話が始まった。話の途中でも鐘が鳴る。ハン師も話を止め、自分の呼吸に集中する。

このリトリートでハン師は四回の法話をした。大切なことは、心をいまにかえすこと、だという。いま自分がいること、そして自分がいてほかのものがあるのを気づくことからすべては始まるのだという。そのために自分の呼吸を意識し、さまざま瞑想を行うのだ。誰にでもある怒りも、自分の友人と思うことで、その怒りを大切にすることができるとハン師は言う。そしていつでも瞑想していることで、あらゆる感情を自分の友とし、あらゆる人々の立場に自分を置くことで相手の良き理解者となることだ。

きると言う。

どれだけマインドフルでいることができるのか、いつもいつも自分に気づいていられるか、ということだ。

ハン師のゆっくりとした、一言一言をかみしめている内に座る瞑想の時間となる。ベルの音がホールに響きわたり、そこにいるすべての人が自分の呼吸をこころの中で数え始める。

ハン師の話の後だけに、何かそれまでとは違った緊張感とそして安らいた時間が過ぎて行く。30分はすぐに過ぎた。そして就寝の時間となる。各自、自分のキャビンに戻る。もちろん歩く瞑想で向かう。キャビンに戻っても誰も口を開かない。翌朝のプログラムまで聖なる沈黙を守るからだ。

こうしてリトリートの初日が終わる。振り返れば今日は半日ながら、本当にしゃべらない一日だった。普段しゃべり続けているだけに、何か不思議な感じではあったが、いつもより落ち着いた気分だった。寝所の中で今日教わった

「タルリラクゼーションを実践する。東京では深夜の2時には寝たことがないが、10時過ぎには眠りに落ちていた。

二日目以降も予定通りに進行し、いよいよ最終日となる。午前中に授戒式が行われる。前夜説明がされ、強制ではなく、あくまで自主性に任せるという事だった。授戒という言葉に、明日はどうします、といった話しが聖なる沈黙を破って行われた。「結局、宗教なんですわね」「授戒するとうなるんですか」とみんなの興味は尽きない。巷ではオウムが世を騒がしているだけに、不安が拭いされないのだろう。オウムと一緒にしてはハン師に失礼だとは思ったが、やはり授戒という言葉には抵抗がある。ハン師の五戒を守ること。守ろうとする努力が大切だということだし、ハン師の五戒は現代という時代を十分に意識したものである。すべては明日に決めることにして沈黙に入った。

簡素な祭壇のように壇上が整えられ、授戒式が始まる。簡単な説明のあと授戒を受ける人が

歩く瞑想のあと、屋外でみんなで時間を過ごす。



前に進み出る。

出ようか出まいか、迷っているうちにタイミングを逸した。しかし迷っているなら出るべきではない。授戒を受ける人たちが礼拝を重ねる。およそ二時間で授戒式は終わった。

明日はいまの積み重ね

おそらく人生の中で最もしゃべらなかった四日間を終え、東京に戻った。この貴重な時間を過ごさせてくれたお坊さんのお寺にお礼に行った。お坊さんは何も言わず、本堂に通す。静かに腰をおろすと、ベルが鳴った。

思わず、自分の呼吸に集中した。

「お疲れさまでした。いかがでした」

四日間の体験を話し、とてもいい機会を作ってくれたことへのお礼を述べた。

「いまの自分に気づくことで、あらゆるものの関係に気づく。そのための方法としてハン師は瞑想するのです。しかもさまざまな瞑想法を

ティツフ・ナット・ハン師



取り入れることで、どんな時でも自分に気づいた状態にいられます。

実は私たち日本の仏教の座禅や念仏も、自分に気づくための方法でもあるのです。これを機会にあなたにあった方法を探し、身につけてください。いまの自分に気づけば、回りのあらゆることに気づくはずですから」

リトリートから2カ月。仕事のアポイントがどんどん入る。へたをすると半年も先の約束もある。だが、いまを積み重ねていかなければ半年先も一日先も、今日の午後さえない、ということをしつかり心に刻み込めるようになった。

ハン師、そしてお坊さんにお参り。

昔から「門前の小僧習わぬ経を読む」などというけれど、寺で生まれ育った私にはそれと逆の（？）おぼえが、微かにある。

あれは小学校低学年の頃だったから、おそらく昭和30年前後のこと。夏休みのある日、父親が海にでも連れて行ってやろうか、と言い出したのだ。

日頃、やたらと忙しがってばかりで、まづもって寺族だの、家庭だののサーブスなどしたことのない父の突然の提案なので家族一同はて面妖な、とも思っ

たらしいが折角の申出である。母の勧めもあって一応嬉しそうな顔でついて行くことになった。これが教区主催の夏期僧堂と呼ばれるイベントの員数合わせだったらしいことはずっと後

になって判明すること。子供にはそこまで読めるはずもなく着いてみると、そこは確かに海。

しかも宿舎らしいお寺には同年代の子供たちがいっぱい来ていて少なからず心はしゃいだ。

さあ水着に着替えて海水浴だと思つたら、全員、机の前に座らされた。「？」と思ううち、

「さ、一緒に読んでみようね」渡されたのは経本。（えーっ、

こんな難しい漢字ばかりの読めないよ）隣の子が呟やいた。

少し年長の子が（なんとかなるよほら全部フリガナがついてる

から）（ほんとだ）その第一頁の最初の行を全員自信满满、大声で読んだ。「ぐわんがしんじやう！」なぜグワンが一番最初から死んじやうのだろうか。

子供心にも不条理なものを感じはしたが、確かにそう書いてあるのだから仕方がない。「おいおいそりや違うよ」先生たちは大慌てで教えてくれたがこれはすべて経本のせいであつた。

戦前に印刷された経本のルビは当然のことながら、全て旧カナ。つまり「願我身浄如香爐」のフリガナは「ぐわんがしんじやうによかうろ」純粹戦後の小学校国語教育を受けている真っ最中の僕らがヒラガナ表記通りに読んでしまうのは致し方ないことだったというわけだ。このときの門前の小僧たちと時々会う。それぞれに立派な僧侶として活躍しておられる。あんな経験もあつてよかったのかな、と思う今日この頃である。（一）

ぐわんがしんじやう



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、
TVウォッチング、紀行文その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

新盆

匿名希望

——
迎え火

もう迎えぬ人は幾らもいるけれどひとりの気配にふと振り返る

迎え火を焚く自分など想像もせずに来し方遠きまなざし

泣きながら合掌すればこの墓地に眠る眠れり眠りをり樹々

すでに虹の橋は掛かっているはずと祈って今日を死んでみることに

——
盆棚

タタギヤタヤ不思議な言葉焼香の煙に消えて薄青きかな

——
送り火

あなた・夢・指切り・夢ね・美しき残像追えり闇のキャンバス

仲夏ゝ晩夏

誌
上
投
句

父ありしごと筆置かれ星月夜
写経して正座の膝の汗少し

吉田ゆきゑ（東京）

雪解富士横一線の雲とあり
友が逝きまた友が逝くお盆月

児玉良男（静岡）

蛍光灯の残像消えぬ夏の夜
金魚玉おもちゃのカエルを主としぬ

近藤あずさ（東京）

雪溪に彼の世の星のシャンデリア
ワタスゲの揺れやめやうとしてやまず

児玉仁良（埼玉）

句会の愉しみ

開かれた寺院をめざして

神楽坂百句会・報告

東京、神楽坂はいまむしろ奇妙な活気に溢れている。幾つか残った高級割烹はまだそれぞれに意軒軒昂だが、それにもまして表通りの、いわば若い喧騒が噓せかえるような雑然。その混沌とした佇まいが、かえって街の旨味を色濃くしているようにも思える。

その裏へ、またその裏へと狹隘な坂道を、けれど僅かに入るだけで不意に、銭湯、八百屋、乾物屋と並ぶ路地に出る。

あまりにも下町。かつて慣れ親しんだ下世話な在り様を否応なく見せつけられるのもまた、この街の複合、重層の構造を強く感じさせ、更に面白い。

その懐かしいような路地裏の一軒の小さな赤提灯、呑み屋の二階が「百句会」の常設会場になっていた。

集まったのは十人。生い立ちも職業も年齢も性別も、つまり概ね全人格的にいって、ことごとく異種の人々。それが、たかだか俳句の会のためだけにそれぞれ貴重な

時間を割いてやって来ている。嬉しいような哀しいような、つまりある種素晴らしい集まりである。

開かれた寺院。即ち、住職、寺族も参加する型の（地域の文化コミュニケーションとしての機能を果たすべき寺院の在り方のひとつを求めにやってきた取材班には、この句会とはとりわけ新鮮に感じられた。

ところで、この会、どうも何が何でも百句作るというのが謳い文句であるらしい。だからこの場合、要するに、ひとり十句。

その場のアドリブで十の題が出る。といっても、ひとり一題はそれぞれが出す。「袋返し」と此処では呼んでいるが、封筒の表に一題を書き、一句作って中に入れ、隣に回す。回されたら、とにもかくにも、封に書かれた言葉を使つて最低一句作らねばならない。

完全な即興。五七五のインプロヴィゼイション。何が何でも作って回さなければ自分の処にだけ封筒がどんどん溜まってしまふ。それが何より辛い。ちよつと古い比喩でいえば、いわば「不幸の手紙システム」とでもいうべきか。

題には、殆ど季語は選ばれない。この日は「テレク
ラ」という珍妙な題が回ってきて皆、七転八倒した。も
つとも、多くの参加者はこの語を充分理解できなくて、
一緒に参加した『浄土』のアートディレクターの十四郎
氏が「それでは私が説明します」と、ビジネスとしての
内容やそのシステムの詳細について、三流通刊誌知識を
駆使して見事に簡明に語ったのが、誇らしいやら恥ずか
しいやら。

全員何とか十句をクリアするころ、一座さすがにホッ
とした空気が流れる。ところが、やおら時間を見れば何と
始まってからまだ一時間しか経っていないではないか。

● 浄土

枇杷の実の一つ落ちたり 蠅 浄土

夕焼けの方へ急げと 浄土 ならず

月ぎめに 浄土 来にけり 百日紅

練達の皆さんに引つ張られたとはいえ、十四郎氏を含
めた取材班としてはちよつと自慢な集中力ではあった。
幾つかの題、何とか自席を通過させていくうち、誰が
出したのか「浄土」と表に書かれた封筒が回ってきた。
そのこと自体が面白く、とりあえず、その題での十句
のみをここに紹介し、この日の句会の報告としたい。

苦し紛れあり（私だけか）、会心作あり、隣席の女流
俳人のあまりの呑みっぷりへの感動あり。『浄土』の読
者諸兄に、句会とはかくも苦しく、また、それだからゆ
えに驚くほど愉しいものである、と感じて頂ければ少な
からず幸甚である。（本誌・Jフオーラム取材班）

裕

十四郎

亞子

無人駅風も浄土へ半夏生

哲郎

浄土へと梅雨のこの世を脱出す

久子

蛇莓浄土に行くということも

せつ子

浄土とは父母と逢える花火の夜

敬一

クロワッサンほのかに甘し浄土の梅雨

いづる

蜘蛛の糸浄土の迎えがバスで来る

まさる

山崎せつ子の浄土は梅雨の徳利立つ

仁

事務局便り

●平成七年度 総会のご報告

去る七月一日、法然上人讃仰会の平成七年度定例総会が、東京・芝の大本山増上寺にて行われました。議事に先立ち、大正大学講師、八王子竜泉寺住職、武田道生先生より「新宗教を通してみた現代社会の問題点」と題した講演を拝聴しました。尚、この講演は本誌九月号に掲載予定です。

その後、諏訪貞松院住職・山田和雄議長との進行により、次の各議案が承認されましたのでご報告申し上げます。

- (1)平成六年度事業報告
- (2)平成六年度会計報告
- (3)平成七年度事業計画
- (4)平成七年度会計予算

本年度の事業計画としまして、昨年度、福島県専称寺で行われ好評を博しました念仏研修会を来たる八月十七・十九日、富山県高岡市・大仏寺（高岡大仏）を会所に予定しております。参加要項等、詳しくは事務局までお問い合わせ下さい。

●J・FORUM（浄土フォーラム）

ご好評を頂いております、皆様のためのコーナー（J・FORUM）。毎月、投句、投稿を頂いておりますが、編集部ではもともとたくさんの方の秀作をお待ちしています。短歌や俳句、書評、随筆や詩、身近な出来事や情報など、左記の要領でどんどんご応募下さい。私たちは、読者の皆さんと一緒に、この「浄土」をより楽しい、すばらしいものにしていきたいと考えております。

1 随筆・詩など：四百字詰め原稿用紙十枚以内
2 俳句・短歌・川柳など：二首まで。

3 その他、本誌の体裁や掲載記事に対するご意見やご感想など、何なりとお気軽にお聞かせ下さい：適宜。

タイトルは自由です。投稿は随時受け付けておりますが、採否に関しては編集部にご一任下さい。また、原稿は返却致しませんので必ずコピーをお持ちの上お送り下さい。採用分に関しては記念品を進呈致します。

●読者アンケートのお願い

編集部では「浄土」のより一層の充実を図るために、皆様にアンケートをお願いしております。

①七月号でもっともよかった記事

②今後、掲載してもらいたい記事、希望する

内容

③法然上人鑽仰会の活動として望むこと

④その他、ご意見、ご感想など

を、官製はがきまたはFAXで事務局までお送り下さい。もれなく記念品を差し上げます。ご協力よろしくお願いします！

●新会員募集のお知らせ

檀信徒、お知り合いの方にも本誌のご講読をお勧め下さい。ご寺院の皆様方にはなるべく一般会員へのご入会をお願い致しております。一般会員の方には本誌を毎号五部お送りしておりますので一層読みやすく、楽しくなったこの「浄土」を是非とも檀信徒とともにお読み下さい。また、お友だちへの贈りものにされてみてはいかがでしょう。

ご贈呈先の方のお名前、ご住所をお知らせ下さい。きつとあなたのまごころが伝わるはずです。

●新規会員紹介（敬称略、順不動）

〈講読会員〉

*神奈川 川崎市 井上栄次

*東京 渋谷区 内田慶一

*同 港区 真田勝年

*静岡 三島市 児玉良男

※五月号掲載の〈福島・浜通り組 善導寺〉は中央組の、また、七月号掲載の〈宮城・桃生郡 伊勢谷金治、関口ミヤ子、松坂かね子〉は石巻の誤りでした。ここに訂正、お詫び申し上げます。（敬称略）

↓アンケート、お問い合せ、投稿は：

法然上人鑽仰会

〒一〇五東京都港区芝公園四一七-四

明照会館内

TEL 〇三-三五七八-六九四七

FAX 〇三-三五七八-七〇三六



盛夏の季節を迎え、如何お過ごしでしょうか。この時期、暑いなんて言っていないとはいえないほど忙しいご寺院も多いことでしょう。電話などでお話しした時、つい最後に言う言葉が見つからず、「頑張れ」という言葉、入院をしている患者さんに向かって言ってしまった、受験勉強の子供たちに向かって言ってしまった、ついこの会話の最後に言葉が足りません。だから言うほうも言われたほうも気持ちよく受け応えしているようです。しかしある本で、この言葉の本当の意味を辞書で見た時に、もうこの言葉が嫌になつたという話を読んだことがあります。その本によれば、この「頑張る」は当て字で、本当は①我をはる。②苦しさ負けずに努力する。③ある場所を少しも動かさず耐える。ことだそうです。《大辞林》三省堂版）

そうならば、②はともかくとしても、①、③の意味では良い意味とは言えません。また②にしても補足の言葉が必要に思われます。自己の状況を否定した努力は、劣等感しか生まないからです。だから容易に「ガンバレ」と言うのは、どうも慎んだほうがよさそうです。

さて、ご好評いただいた内堀先生の連載に代わって、今月号より「外国で生活して」の新連載が始まります。国際化が進んだ今日、海外旅行をする方も多いわけですが、毎月違う方々にご執筆頂き、外国での暮らし、外から見た日本観、日本人観や、外国での生活を語っていただくと思っています。（長）

編集チーフ

長谷川信潤

編集協力

オフィス 頼代 佐山哲郎

編集顧問

大室了晴

浄土

六十一巻八月号 頒価六百元
年会費六千元

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成七年七月二十五日
発行 平成七年八月一日

編集人 宮林昭彦

発行人 牧田諦亮

印刷所 株式会社 平文社

写真植字 株式会社 シーティーイー

〒一〇五 東京都港区芝公園四七四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三三三三七八 六九四七

FAX 〇三三三三七八 七〇三六

LIFE TOGETHER



人間のやさしさをクルマに。



使えるよなあ、こいつ。



こんどのパルサーは、
たのしい新実用主義。

- いろんな機能性に、ヨロコビがあるのが新しいのだ。それが
○ こんどのパルサーのたのしい新実用主義。しっかり遊ぶ、
○ しっかり仕事する。しっかり生活する。Mr.しっかりのこれからを、
○ 気持ちよくサポートします。

これ安心

■運転席SRSエアバッグ
システム全車標準装備。



走る走る

- 標準、マルチリンクヒムサスペンション(リヤ)。
- うれしい低燃費=1500X1(5速フロアシフト)
18.2km/ℓ、1500FREZZO(4速オートマチック)15速
フロアシフト)19.8km/ℓ、10-15モード燃費/
運転者側側面)。

らくちん

- 上質感のある、しなやかな乗りこころ。
- ゆったり室内スペース。

ツイてる

- 新型エアコン。
- トランク、ポケット等、収納性じょうふ。

パルサー4ドアセダン
1500C-J(15速フロアシフト) **131.3万円**

パルサー4ドアセダン
1500X1(15速フロアシフト) **148.4万円**

上記価格にはメーカーオプション(3年保証/5年保証) (13.7万円)が費されたりする。

上記価格はいずれも全国メーカー希望小売価格(税別、北海道・沖縄)

Mr. しっかり 新パルサー誕生

【Mr.しっかり】日常フダン活用。①新パルサーの別名。②新パルサーに乗る人の愛称。

③～状態……新パルサーでたのしい人生を送っている様子。

●PHOTO:パルサー4ドアセダン1500X1、ボディカラーはブルー・インディゴパールM(※税別)。スポーツパッケージはメーカーオプション。●希望小売価格はスペアタイヤ・標準工具付。寒冷地仕様は1.7万円高となります。●保険料、税金(消費税込含む)、登録等に伴う諸費用は別途申し受けます。●希望小売価格は参考価格です。価格は販売会社が独自に決めていますのでそれぞれの販売会社にお問い合わせください。●日産自動車お客様相談室 全国共通フリーダイヤル 0120-315-232 ●お買の方は、お近くのスカイライン、ブルーバード、日産チャリー各販売会社へ。



ノドうつ うまさ。 黒ラベル

ただいま、渴いています。ビールを欲しがっています。

ノドが、体が……。さて、黒ラベル。プシュッ！ゴクゴクゴクゴク……。

このうまさは、何なんだ。ノドたたく快感、

駆けぬける爽やかな味わい。1秒1秒が、

たまらない喜びに満ちている。

この黒ラベルの味、ひとことという？

「ノドうつ、うまさ」それが黒ラベルです。

ビールは、20歳になってからあきかんはリサイクルへ

● 協力の範囲に、自動販売機にも酒類の販売は午後11時から午前5時まで停止しています。

新デザイン缶



サッポロ〈生〉黒ラベル

サッポロビール株式会社

